ドーピングに対する諸説の批判的考察～ドーピングはなぜ問題なのか～

A Critical Study of the Various Views on Doping
～The Reason Why Doping Becomes the Problem～

1K05B019　　井手　雅敏
指導教員　　主査　友添秀則先生　　副査　寒川恒夫先生

1、本研究の動機

2008 年夏、スポーツの祭典オリンピックは北京で開催された。オリンピック大会ごとに、特に注目を集める一つにドーピング問題が挙げられる。各国をあげて、また 1999 年の WADA の創立に見られるように国際的にアンチ・ドーピング活動を推進しているにも関わらず、違反者は後を絶たない。私自身は高校二年生のボート競技で日本代表に選ばれた時に、初めてドーピングの存在を知った。それ以降は個人的にドーピングについて調べ漠然と、ドーピングは「悪」という考えを持っていたが、大学で受講したアンチドーピング論（早稲田大学スポーツ科学部基礎科目）を機に、感情論では問題の本質的な解決にならないと痛感した。ドーピング問題を考えるとき、「フェアとは何か」「人間らしさとは何か」といったスポーツを超えた分野まで巻き込む問題にまで発展し、このようにドーピング問題の本質は単純ではないが、この問題はスポーツの存続・発展のために解決すべき問題であると考え、感情論でなく、ドーピングに対する理論を自分の中でより根拠深くしたいと思ったのが、本研究の動機である。

2、本研究の目的

最終的な目的は、「ドーピングはなぜいけないのか」に対する理論を根拠深くすることである。そのために、まずドーピングの歴史的変遷を調べる。過去に起こったドーピング事例を挙げ、なぜ・どのような背景で、ドーピングに至りそれが問題となったのかを検証していく。その上で、国内に既存するドーピングに対する諸説を、「ドーピング＝悪」という先入観をもたず、中立的立場から考察し、その後批判的考察によって、アンチ・ドーピングに対する自己の見解につなげていく。

3、本研究の方法

本研究は既存の参考文献、及び関連ホームページを参考・引用する文献研究である。

4、各章の概要

第一章　ドーピングはなぜ「問題」となりうるのかを明確にするため、まずドーピングの発祥から歴史的変遷を振り返った。100 年以上昔からドーピング事例が起こる背景には、現代と何ら変わりない構造があることが分かった。また近代オリンピック、現代におけるドーピング事例を取り上げていくうちに、「より速く…」のオリンピック標語に見られる人間の飽くなき探求心が、新たなるドーピングの可能性を導いている。そのような時代の中で、ドーピングが何故問題でどのような問題であるかを考察した。

第二章　国内の研究者達のドーピングに対する緒論の考察を行った。「ドーピング＝悪」という先入観を持たず、ドーピング否定・肯定側面から計 4 つの立場で考察した見解は、それぞれ正当性を持つものである。論じる視点がさまざまな分野、観点からのものであり、それ故にドーピング問題は簡単ではなく、また社会との深い結びつきも分かった。ドーピング問題はスポーツ領域の枠を超えた問題であることを認識した。

第三章　第二章の見解に批判的考察を加え、自己のドーピングに対する見解を展開していった。

ドーピングを禁止する正当な理論は見いだせず、さらには想像から副作用のない薬物・方法により医学的側面からの禁止は抑制力を失うのではと予想したうえで、私たちが、合意のもとに禁止という道を選択しなくては、ドーピングはスポーツという文化の終焉さえ想像させるほどのアポリアであるということを再認識した。

終章　本研究におけるまとめと今後の課題を述べた。論文全体を振り返り、各章の要点をまとめていった。スポーツは元々価値中立的なものであり、それを良くするも悪くするも、それを行う私達人間次第だということが分かった。また競技スポーツはスポーツのさまざまな価値のうちの全てではなくて一つであることの理解が、今後のドーピング問題、またスポーツのあり方へのヒントになるだろうと考えた。